第445号
2019年10月27日

土佐のわらべ

オーテピア高知図書館
子どもの本の読書会だより

《第467回（2019年10月10日）　子どもの本の読書会記録》　参加者：８人
時間：10:00～11:30　場所：オーテピア４階集会室

『科学的とはどういうことか　いたずら博士の科学教室　新版』　板倉 聖宣／著　仮説社

本書では、科学教育の研究に力を注いだ作者が、科学的なものごとの考え方を、やさしく、親しみやすい文章で説明しています。初版は1977年ですが、2018年にこの新版が登場しました。作者からの投げかけに立ち止って考えてみることで、科学の特徴や、さまざまな側面を体感的に学ぶことができる内容になっています。

第一部では、思わず試してみたくなるような７種類の実験が紹介されています。その結果がなぞなぞのように問われますので、実際にやってみるか、読みながら考えてみてください。予想を立てることのワクワク感や、実験が成功した時の驚きや喜びを味わうことができます。第二部では、「スプーン曲げ事件」や「コックリさん」など当時の超能力ブームを丁寧に解説し、科学的にものごとを判断するにはどうすればよいかを考えていきます。

今も昔も、個人が手にする情報は玉石混合です。誇大広告、トンデモ医学、悪意あるフェイクニュースやデマなど、危機は私たちの近くに転がっています。マスコミや企業、政府のうそに惑わされないためのリテラシーは、現代社会を渡り歩く際に欠かせません。作者の「真実を愛する人間を育てたい」という信念は、情報化社会の今だからこそ、強く響くものがあると感じました。

次に、読書会に参加したみなさんの感想を紹介します。

●科学が苦手なので取っつきにくいと思っていたが、丁寧に教えてくれるので読みやすかった。やってみないと信じられない実験も紹介されていて、内容に興味が湧いた。文章もやわらかく、作者の頭の低い姿勢は好感が持てる。うそから発見が生まれるという発想が新鮮だった。

●読み手に実験をさせるのが上手。日常の中にあるちょっとした不思議が科学につながっているんだなと思った。「不思議だな」と思ったとき、手の届くところに図鑑や科学の本があることは大事。こどもの好奇心は、大人が気づいて育んであげたい。

●事実を分かりやすく、意外性をもって伝えているので、なるほど！と思える。紹介されている実験の中で興味のあるものが１つでもあれば、家族と簡単に実験できそう。親にぜひ読んでもらって、「どれに興味がある？」とこどもに本を紹介してあげてほしい。第二部は、今風に書いてもらえるとありがたい。

●読み進めるごとに、固定観念に凝り固まっている自分を痛感した。それぞれの実験の話は、ブックトークなどで紹介するときに使えそう。最近の本ではあまり見られない書き方で、文章を読むのが苦手なこどもも多い中、すすめる子を選ぶなという印象。でも、入門として素敵な本。

●高校の時の科学の先生が苦手で、科学から遠ざかった経験がある。「知識が自信を支える」というのは、とてもいい言葉だと思った。基礎の知識があれば、後から伸びることができると感じている。身近なところで生まれる自由な発想は、将来の発見につながる。そのような発想を奪われると、将来が心配になってしまう。

●卵の実験が印象的。1回であきらめる人は、3回でできることができない。どういう風に考えるかは、どういう風に生きるかにつながると思う。昔の本だから、ずれはあるかもしれないけど気にならない。今のこどもが読んでも楽しいだろうし、実験の意義もよくわかる。科学の最初の入り口に良い本。

●自分の中ではバイブルのような本で、30年ほど前に出版されたころから手元に持っている。作者は、賢い人を育てたいという気持ちで研究を行っていた先生だった。平和でないと、人は賢くならない。また、無知であるから騙される。福島県の原発事故の際にそのことを強く感じた。

次回　11月14日（木）10:00～11:30　オーテピア４階集会室
☆各自、おすすめのクリスマスの本（児童書）をご持参ください☆
（課題図書の指定はありません）